

世紀末／世紀転換期のウィーン
ークリムトとシェーンベルクー



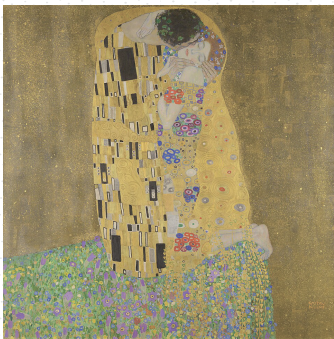
クリムト
「接吻」

現在では、北海道とほぼ同じ大きさ国であるオーストリア。しかしながら約100年前までヨーロッパには、中欧から東欧にかけて広大な領土を誇るハプスブルク家の大帝国が存在していました。ハプスブルク帝国の歴史は、1278年から1918年までの640年間。その事実上、最後の皇帝となったのがフランツ・ヨーゼフ1世（1830～1916）であり、彼の妻、皇妃エリザベートを主役としたミュージカル『エリザベート』をご存じの方も多いでしょう。フランツ・ヨーゼフ1世は1848年から68年間にわたって在位し、1867年からはハンガリー国王を兼任して、オーストリア＝ハンガリー二重帝国を統治しました。

いわゆる「世紀末ウィーン」と呼ばれる芸術文化は、このハプスブルク帝国最後の姿であった、オーストリア＝ハンガリー二重帝国を舞台に花開いたものです。ウィーン中心地をぐるりと取り囲むリング通りと、その沿道に建てられたウィーン国立歌劇場、美術史博物館、国会議事堂、ブルク劇場、市庁舎、ヴォチーフ教会ー。これらはすべてフランツ・ヨーゼフ1世の都市開発によるもので、近代的な大都市へと整備・拡大されていくウィ

ARNOLD FRANZ WALTER SCHÖNBERG

ーンには、帝国各地から膨大な流入民が受け入れられました。そのなかには少なからぬユダヤ教徒が含まれており、マーラーやシェーンベルク等の「世紀末ウィーン」の音楽家の多くも、こうした歴史的背景のなかで登場してくるのです。

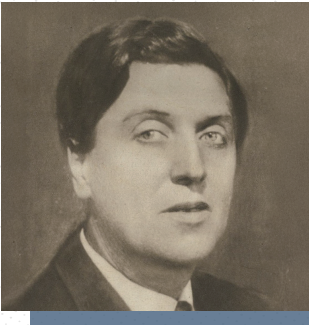


ウェーベルン／
弦楽四重奏のための
《緩徐楽章》

第二次世界大戦後、ダルムシュタットに集まった若い作曲家たちの出発点となったのは、アントン・ウェーベルン（1883～1945）の十二音技法による作品でした。十二音技法について、創始者であった師シェーンベルクよりも厳格な実践者であったウェーベルン。一方、弦楽四重奏のための《緩徐楽章》には、シェーンベルクの《浄められた夜》の余韻とも呼ぶべき甘美な響きが広がります。

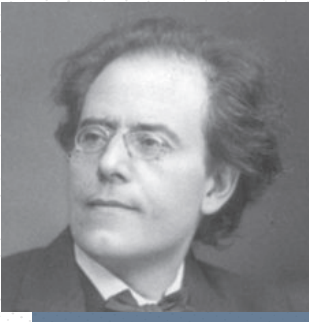
作曲されたのは1905年6月、すなわちシェーンベルクに弟子入りしてからほどない頃のこと。ウェーベルンの作品1となったのは、1908年11月に作曲者自身の指揮で初演された《パッサカリア》ですが、それ以前のいわゆる習作の多くは、1960年代になってから知られるようになりました。曲はA・B・Aのシンプルな3部構成ながらも、Aの部分が変ホ長調、Bの部分がハ長調というロマン派的な調設定のなかで、長調と短調の間を夢見のように行き来します。ウェーベルンの「愛の音楽」と評されるように、恋人（後の妻）ヴィルヘルミーネへの愛が込められているのは明らかです。

詩の世界を歌とピアノで描いていくー。19世紀ロマン派の時代にシュペルトによって確立したとされる芸術歌曲は、オペラに比べると新しいジャンルと言えるでしょう。シューマン、ブラームスへと受け継がれたドイツーリートの世界は、世紀転換期においても豊かな広がりをみせています。



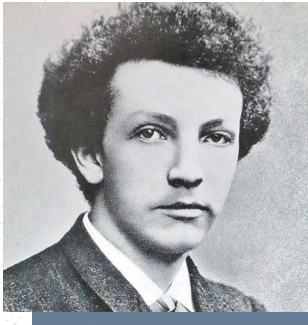
ベルク／
《7つの初期の歌》より
「夜」

アルバン・ベルク（1885～1935）は新ウィーン楽派では珍しく、《ヴォツェック》と《ルル》によってオペラ作曲家として知られます。シェーンベルクの弟子だったベルクは、それ以前も含めて習作期に100曲近い歌曲を書きました。『初期の7つの歌』は1928年、そのなかから自身で7曲を選んだもの。「夜」は1908年春の作曲で、全音音階を使用したドジュッシー的な響きが特徴となっています。



マーラー／
《リュッケルト歌曲集》より
「私はこの世に忘れられ」

グスタフ・マーラー（1860～1911）はボヘミア出身。生前は主にオペラ指揮者として活躍し、作曲家としては交響曲と歌曲を中心に創作を展開しました。1901年8月に作曲された「私はこの世に忘れられ」は、リュッケルトの詩による歌曲のなかでも特に有名な1曲。社会のわずらわしさから身を隠し、ひとり静かに「私の天国、私の愛、私の歌」に生きる境地が歌われます。



R.シュトラウス／
《4つの歌曲》より
「明日」

リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）はミュンヘンに生まれ、交響詩、続いてオペラ分野で重要な功績を残しました。妻パウリーネがソプラノ歌手だったこともあって、シュトラウスは歌曲作曲家としても多くの優れた作品を生み出しています。「明日」は1894年5月に作曲され、結婚の贈り物としてパウリーネに献呈された《4つの歌曲》op.27の第4曲に収められています。

ウェーベルン／
《8つの初期の歌曲》より「仰ぎ見て」

1902年からウィーン大学で音楽学を専攻したウェーベルンは、その2年後からはシェーンベルクのもとで作曲も学びました。『8つの初期の歌曲』は作曲者の死後、指導を受ける前に書かれたと考えられる歌曲がまとめて出版されたもので、デーメルの詩による「仰ぎ見て」は1903年の作とされています。曲は下降する半音階で印象的に始まります。

R.シュトラウス／
《4つの最後の歌》より「夕映の中で」

1945年5月にドイツが無条件降伏した時、すでにシュトラウスは81歳を迎えようとしていました。《4つの最後の歌》のなかで最初にかかれた「夕映の中で」は、アイヒENDORFの詩に付曲されたもので、1948年春に作曲されています。この詩に、自身と妻パウリーネの人生を重ねたシュトラウス。ひばりが静かに飛び去っていくのをピアノが描いて、曲は閉じられます。

シェーンベルク／
弦楽六重奏のための《浄められた夜》

20世紀前半の音楽史に多大な功績を残した新ウィーン楽派のなかでも、後期ロマン派から無調、そして十二音技法へと、常に先頭に立って時代を切り開いていったのがシェーンベルクでした。1899年に作曲された《浄められた夜》には、二つの特徴が指摘できます。弦楽六重奏（ヴァイオリン2、ヴィオラ2、チェロ2）という編成によること。スコアの冒頭に、リヒャルト・デーメル（1863～1920）の詩が掲載されていること。1897年には長年ウィーンに暮らしたブラームスが亡くなり、翌1898年にはR.シュトラウスが交響詩《英雄の生涯》を完成させています。こうした状況のなかで《浄められた夜》は、オーケストラではなく伝統的な室内楽の編成によって、交響詩ではない標題音楽を書くという、若きシェーンベルクの意欲作として生まれました。

デーメルの「浄められた夜」は5連からなり、「二人は冬の枯れた森を歩いていく／月が寄り添い、二人は顔を見合わせる」と始まります。奇数連は、月明りのなか森を歩く男女の描写。第2連では、女性が「私は子供を宿しているが、あなたの子供ではない」と打ち明けます。第4連では、男性が「それでも不思議な温かさが輝いている／君から僕へ、僕から君へ。／それが見知らぬ子供を浄めてくれるだろう」と語りかけます。デーメルはこの時、互いに子供を持つ既婚者同士であった、イーダ・アウエルバッハと激しい恋に落ちていました。詩の「二人」が誰であるかは言うまでもないでしょう。この不倫関係は1895年から5年以上続きました。

1899年はシェーンベルクにとっても、作曲の師であったツェムリンスキーの妹マティルデとの恋愛が始まった年であり、二人はオーストリア・バイエルンで休暇を過ごし、この地で《浄められた夜》は書かれました。曲は交響詩の慣例に従った単一楽章によって、詩の5連をそのまま音楽に、つまりA・B・A・C・Aという構成に落とし込んで作曲されたと説明されます。第2連（Bの部分）では二短調、第4連（Cの部分）では二長調が基調となっており、めまぐるしい転調を繰り返しながら、音楽は暗から明へというドラマを濃厚に描き出していきます。曲を締めくくる晴やかなコードについて、シェーンベルク自身が「この悲劇の一夜を浄められた夜へと変えてしまった自然の奇跡を賛美する」と語ったことは、作品を理解するための重要なヒントと言えるでしょう。

石川 亮子（昭和音楽大学准教授）

